

公開シンポジウム

いじめ問題の多角的検討：日英での取り組みの現状と課題

〈分科会1〉友人関係の変化とスクールカウンセラーとしての関わり

話題提供者 私立スクールカウンセラー 保坂 一己

2000.3.4

私の背景としては、15年前にスクールカウンセラーとして仕事をし始め、生徒数や教員数、歴史的背景がほぼ同じような中高一貫の女子校を歩いてきました。クリニックモデルのスタイルが既にできているところに私は入って行きました。そこで、学校の中の相談室というのは問題のある生徒だけが利用するところではないということを感じました。それから、たとえ個人面接をしていたとしても、その人に言った言葉がその後ろにいる集団に大きな影響を及ぼすということもわかりました。それで私は、心理というプロパーは全く一人で、その中で活動していくために、ある程度ニーズに合った動き方をしたいと思ったので、スタンスを変えました。一言で言えば成長促進的な関わり方ということです。相談室はグループでの利用が可能です。それから子ども達が持ちこむ媒介物や生徒とのお喋りはすごく重要な要素です。お弁当も一緒に食べますし、不登校の場合は家庭訪問も致します。手紙のやり取りもしています。これらにどこか成長促進的な意味合いを見ているので、何かが起これば、それであなたはそのことに対してどうしたいのかとかいうことをずっと問うていく姿勢を持っています。こういった行動が成長促進的な関わりとして、理解されるかどうかという問題は残るのですが、学校の先生方にも伝えていきたいとは思っています。15年前と今の一番差として感じるのは、特にいじめの問題で子ども達が大人をあてにしなくなったなということです。

〈15年前の友人関係〉

15年前の友人関係とまたそれに関わるスクールカウンセラーとしての働きと今のそれを比較することで話させて頂きたいと思います。とにかく最初子ども達があまりに群れたがるのにびっくりしました。中学生は、学期の始めにあちこちでメンバーの入れ替え戦がおこります。まずできたグループは、少し親密になっていくとガチャガチャ小競り合いが起こったりします。高校生のほうは、くっついたり離れたったりというのは見うけられませんでした。高校生は、異質さを受け入れて、ある程度黙認できる大人なんだなというふうに思いました。

15年前は排除される側もする側も両方相談室に来るんですね。出される側は、なんかみんなが私を避けてるんじゃないかという段階で一人で来ました。排除する方はグループで、その時のボス的な存在が「これはみんなの意見だ」って話で来るんですが、聞いてみると、これはこの人の意見なんだなというのがわかります。私は成長促進的な関わり合いをしたいと思ってましたので、エンカウンターグループのファシリテーターのようなはたらきかけをすることにしました。グループの強く意見を言えない子に「ちょっとあなたの意見はどうなの」とか言ったりすると、そういう子は個人個人の話や考えを聞いてもらえる経験に乏しいですから、それだけで非常にパワーが出てきます。そうこうしているうちにちょっと違う意見がぼつりとでたりして、一人一人の生徒にパワーがあがるのに伴いボス的な存在の子のパワーが下がってきます。そうすると起きるのはグループの解体です。排除されそうになっている子には、まず私がこう感じるっていうのをとにかく聞きました。それと、ただ感じてるのかと、現実になんのかっていう方向性で、非常に具体的なところで話し合いを進めていく形を取りました。

高校生はすでに出来あがっているグループを解体するつもりがなく、人間関係でうまくいかないときが出てきたときに相談しにきます。それから、学年中全員がグループを作らなくちゃいけないっていう時に、一匹狼の子達を自分達がどう抱えていけるかという相談にきました。あとは、高校生になると人の性格はなかなか変わらないとなつて、そういう意味では安心してつきあっていけました。

Q) 最近中学生と接していることが多いんですけど、グループの友達関係が希薄だなあというのを感じるんですが、そういったつながりみたいなのは15年前だと共通点を見出して共感を持ったりとかいう部分でつながっていたんでしょうか。

A) 一言でいうと、一度出された人も細々つながってはいけてたし、それとそこまで相手を追い詰めるのはあまりしなかったという感じはします。よくグループで来た時に出る話題が、最終的に相手と話し合いたいというん

ですね。一对多はそれだけで暴力だよと言うと、一对多になってもうここまでって思ったらジャッジをしてくれという役割をスクールカウンセラーに求めてきました。今はグループの排除する側はこなくなりましたから比較にならないかもしれませんが。

Q) そのジャッジは、生徒達からお願いしているから、不満は出ないんですか。

A) それが出る時には、私がストップをかけるほどのことまで実際にはやらないです。私を意識することで、自分達できちんとブレーキをかけていたのだと思います。

〈最近の友人関係〉

今の友人関係のことをお話したいと思います。「いじめ」という言葉に以前よりもいじめている側が敏感で、非常に表面的な付き合いを維持します。マスコミの関係もあるんだと思うんですけど、いじめっこになりたくないんですね。もうひとつは、「友達」とか「親友」とかという言葉の意味する交友関係は以前に比べて浅いですね。友達って一体どこが友達なんだろうというのはありますし、親友って言った時に、意見の食い違いはなるべく出さないようにというところで親友っていうのかなと。それから、気遣いがグループの中にいられるポイントです。東京都の教育研究所の平成9年度から10年度の報告としてあったことなのですが、グループの中で面白い話をするとか楽しい雰囲気になるようにするとか、誰かが機嫌が悪くならないようにするとかけんかしないようにするとか。それから、グサイと思われぬようにする、一人だけいい子にならない、いじめがおきないようにする、こういう気遣いを常に努力していて、これに欠けていると出されると思います。ただ、出され方というのは、がちがちやっちゃって出される感じではないですね。それから、大きなポイントなんですけど、友人関係のごたごたに親御さんの介入がまま見られるようになりました。高校生の方はどうかというと、進路選択によるサブグループができますが、将来的な方向性が一緒ですから非常に共通するものを持っています。

それともうひとつは、対人関係がうまくいなくて出ちゃった子がそのまま孤立しているというのがあります。私のところには、グループ側から来ることがほとんどなくなりました。それと、気遣いに欠ける人が押し出されちゃった時に、前は感じた段階で来たんですけど、今ははっきり押し出されてから来ます。要するに何しに来るかということ、行き場がなくなっちゃうんです。それで私は、大人は信用されなくなったかなと思うんですけども、利用できるものだけ利用しようという感じなんです

ね。行き場がなくなっちゃって来た人には、仲間はずれにされていることを認めたくない生徒がまずいます。認めたくない子は、行き場がなくなったことをいわないし、困ってるという言葉がなかなか出ませんね。出されちゃった人はまずお弁当食べる相手がいないのに困って私のところに来ます。何回か食べているうちに、相談とかが出てきたら、具体的な友人関係の話し合いに行くんですけど、なかなかそれは出にくい子もいますね。中には、次第に元気さを取り戻して、他の子に向かっていく子もいます。

それから、仲間はずれにされていることをわかっていない子がいます。求められる気遣いについては同じ失敗を繰り返しちゃうわけですね、わかっていないから。そういう子は全体的に幼いなという印象を受けます。こういう子に対しては、学校生活のことをこちらから敢えて話題にしてみます。これはなぜかということ、対人スキルを身につけないままやり残して来ちゃっている子たちが、大学卒業した後にひきこもりになったりするのを何例か見ていたからで、対人スキルのトレーニングといえば大げさですけども、私との間で具体的にやることを提示して敢えておせっかいをしています。

最近は保護者や教員への対応も、こういった問題でわりと関わっています。友人関係で登校渋りなんかが出てきてしまったときは、教員へのコンサルテーションと、母親面接と、あと学校内でチームづくりをします。教員へのコンサルテーションとしては、集団でダイナミクスが起こっているはずだという視点をお話していることが多いです。それから場合によっては、親御さんとご本人を私と担任とで合同面接する場合があります。これは大人達が当てにされてませんので、大人達はあなたのことに関してきちんと関与するつもりがあるという姿勢をわかってもらおうということが目的です。それが中学生ですね。高校生は、グループの人間関係そのものの相談がほとんどないです。

最後ですけども、その他の対応として、誰かがなんとかというのではことは収まらないので、人間関係づくりのための心理教育プログラムというものの啓蒙が必要だなと私は思っています。たまたま学校側から依頼された教員研修では、構成的エンカウンターグループのいわゆる体験学習やアサーショントレーニング、自己表現のトレーニングを取り入れたりしています。私としては今後友人関係、とくにいじめなんかの問題をスクールカウンセラーとして学校に関わる時には大きな視点になっていくのではないかと考えていますし、できれば続けていきたいなあと思っています。

Q) 相談員としてコンサルテーション的に関わると、今の子どもたちとどういうふうに関わったらいいかかわらないという戸惑いを持っていらっしゃる先生が多いです。15年前の教師生徒関係と今のそれはどういうふうに変わってきているのでしょうか。

A) 一言で言ってしまうと、15年前の方が教師と生徒という立場がはっきりしていたと思います。今のほうが先生方はお友達的な存在に生徒にされている感じがします。一方でそれを非常に批判的に見ている子ども達もいます。

Q) 私は中高一貫の高校に行っている娘を持つものなんですけど、非常に友人に気遣いを持っている。子どもが本当の親友を得る機会というのはあるのだろうかという疑問が湧いてきたんです。

A) それこそお母様方やお父さん達に中高で出会った友達は一生ものだよって聞かされている子達なんで、期待を持ってきますね。だけど現実はずうみたくて、本当に心から何でもいえる相手を欲しいというのは切望しています。みんな大学で期待してますね。だから大学の学生相談にそういう持ち越しの子が来るんだと思うんですけど。(でも実際は作れないかもしれないですよ。) だからこそ人間関係づくりのプログラムを大人達が考える時期なんだろうと思うんですけど。ただ、例えば問題が起こったり困った子が出てきた場合、ピンチは子ども達の人間関係が深まるチャンスです。もめていいんだと思うんです。そこで出てきたいろんな人との違いっていうのが親友ができる一つのチャンスですね。

司会) 親密さの逆説があるんですね。親しさというのは傷つけ合う事をうちに含んでいる部分がある。人の心を傷つけてはならないというタブーが非常に広がってしまったことによって、非常に気遣いをした親友はあるけれども本当の親密さというものに到達できず、ぐるぐるそれを求めて回っているという状況が生まれていると思うんですよね。アグレッションの肯定的な側面まで踏み込んでいけない。とすればカウンセラーの役割も少し違った形態のものを工夫していかなくてはいけない状況に来ている。あまり具体的な提案や実践がなされていない中では、保坂さんが15年前からの長い経験による人間関係づくりのための心理教育プログラムというのには共感をしているんです。

Q) 私のところは公立で、一小一中9年間という形で、いじめの状況がもう少し激しいです。具体的には、一部のピラミッドの上の子ども達が、他のピラミッドの底にいる人たちを、入れ替わり立ち替わり手足のように使うというような構造です。それでトップの人達はもちろん

相談に来ませんし、下にいるお子さん達も被害者であり加害者であったりして、いじめられている苦しさとかを語らないので、教員研修なんかで言ってくれないとアプローチできないという話が出ます。

A) 子ども同士のことは口を出すともまずいんだというのは15年前に経験しました。それで、一つはアサーショントレーニングを学年全体にやったことがあります。こういうのは誰が悪いそれが悪いじゃなくて、世の中はこういう考え方があるぞと伝えていくというのは一つの手なんだなと思いました。それは考える視点をもってもらえる経験にはなったかなと思います。他の学校の教員研修で申し上げたのは、クラスの空気を少し風通しをよくする何かをしたらいかがですかということです。それから自分の思いを言うチャンスを作ってあげようとか。でもこれが全ての集団に対して有効かどうかはわかりません。

Q) 教室相談員をしていて、その子に力があるんだなあとかそういうのを実感する時があれば、もう少し積極的に関わらなくちゃならないのかなって思う場面もあるんですけど、その見極めっていうか、具体的にトレーニングの内容っていうのを教えて頂きたいと思うんですけど。

A) それが必要かなと思うところは、その子の発達レベルだと思います。お食事なんか一緒にしてみると、どれくらい幼いかって見えてくるものがあると思うんです。生活発達年齢というのかな。時にはお母さんにも協力してもらって生活の中で育てていくという形を取ります。トレーニングは生活レベルで、本人にとってみれば、トレーニングされているなんて思いもよらないだろうことを足がかりにしています。

司会) 家庭でやればいいはずのところ、家庭でできない子どもが普通になってきている。どうしても今からのスクールカウンセリングでは、家族を含めての対応の必要性が高まってくると思っています。心理療法をやる中には選択肢として、個別面接と同時に家族面接ということが、事例に対する的確な対応のために必要になってくるようになると思います。いずれ体験を持ち寄った時には今のような話をもっと広がってくると思います。独自に日本で展開すべき心理教育プログラムなどをお互い持ち寄って修正だとかいろんなことがこれから始まるんじゃないか。今後こういう機会があれば、それぞれの立場の違いはあるかと思うんですが、また経験を持ち寄る機会があればと思っています。